

日常診療における移行支援でコメディカルが目指すもの

汲田 明美

愛知県立大学看護学部

患者の移行支援で留意する点は、まず患者の生活や気持ちを教えてもらう姿勢で関わり、その上で専門職の立場で、患者に合った療養を提案する事が重要だと考える。

移行支援を考える時期は、患者は、病気を抱えつつ自分のアイデンティティを獲得してゆく時期である。医療者が勧める療養行動が、思春期の患者のしてみたい生活、友達との交流に影響することも多い。内服の副作用は患者の外見に影響し「治療に対する陰性感情」に繋がりがやすい。この時期、患者は親との会話が少なくなり、親だけでは療養管理は不可能となり、その親子の力に合わせた医師やコメディカルの関わりの必要性は高い時期である。

(親による SLE の子どもについての「語り」の分析結果ですが) 診断後、患者は家族と二人三脚で治療に取り組む。退院後、患者は、療養行動を最初は守るが、次第に SLE である自分と、SLE でありたくない自分との間を行き来している姿がわかった。具体的な結果は発表で示し、援助方法の方向性等を提案できれば、と考える。

患者の日常の状況は、様々である。日常診療の中で、現在の生活や気持ちを知ることは、ニーズの把握に重要で、今、その患者に必要な支援に繋がる。患者が療養の相談をしたい時、医療者を頼りにする。医師に相談できない事は、コメディカルに相談する。コメディカルは、職種は問わず、患者と話す人、楽しい話をする人、家族と話す人、厳しい話をする人等分担も必要である。患者が生活について楽しく話せる人、相談しやすい人等に出会える環境があって、その上で療養管理に関する厳しい意見にも耳を傾ける、のかもしれない。

親は、療養管理を子ども自身に移譲してゆく、子離れする時期である。具体的な行動や受け止め方等を助言し、親の眩きも受け止め、支援してゆく。病気により家族全体が変化することも多く、病棟では、きょうだい支援活動も行っている。

また患者は将来を考える時期にいて、コメディカルの働く姿も、影響を与えている。

成長を育てゆく点で、すぐに答えが出る支援は少ないし待つことも多いが、継続的な関わりで、患者が「また来よう。」と思い「自立しよう。」と思える外来が増えると良い。